

## 世界の分断と差別に文化政策はどう応答できるのか—アートとポストコロニアルの視座

### 【企画趣旨】

難民・移民の問題、排外的ナショナリズムの高まり、そしてウクライナ戦争に象徴される武力による国際秩序の動揺に加え、植民地主義に起因する歴史的不正義の見直しが進む中、私たちはいま、世界に深く根差す分断と差別の構造と向き合うことを迫られています。こうした現代的課題に対して、文化政策やアートはどのように応答しうるのか。

本シンポジウムでは、その問いへのアプローチとして、芸術を通じた植民地主義の遺産への対峙に焦点を当てた。

前半では、ポストコロニアルおよびデコロニアルの視点に関わる4つの具体的な事例——ドクメンタ15(2022)、光州ビエンナーレ2024・日本パビリオン、山口情報芸術センター[YCAM]、ベニン・ブロンズ返還問題——を各パネリストにご紹介いただいた。

後半では、「ポストコロニアル」と「デコロニアル」という概念の意味や、それぞれが用いられる文脈を整理したうえで、日本の文化政策の現場において、これらの議論をどのように展開・深化させていけるのかを共に考えた。

### 【登壇者】

オズレム・ジャンユレック(ツェッペリン大学)

脱植民地主義文化実践——ドクメンタ15を事例に

山本 浩貴(実践女子大学)

私たちには(まだ)記憶すべきことがある—光州ビエンナーレ2024・日本パビリオンの経験から

レオナルド・バルトロメウス(山口情報芸術センター[YCAM])

Institutionをハックする——YCAMのケーススタディから

秋野 有紀(早稲田大学)

ミュージアムにおける「脱植民地主義」の現状と射程 ~ドイツのベニン・ブロンズ返還を一例として~

### 【コーディネーター】

吉田隆之(大阪公立大学)

藤野一夫(神戸大学)

.....

### 【前半】

オズレム・ジャンユレック | 「植民地主義文化実践——ドクメンタ15を事例に」

ドイツ・カッセルで2022年に開催された芸術祭ドクメンタ15を事例として、ドイツの文化政策における脱植民地的文化実践の可能性とその限界について考察した。

今回のドクメンタは、非欧州圏のアーティスト・コレクティブであるインドネシアのルアンルパが初めて芸術監督を務め、「ルンブン(lumbung)」というインドネシアの伝統的な共助と共有の概念を、展覧会の運営原理として導入した点において画期的であった。ルンブンは、時間・予算・空間・知識といった資源を共同で管理・活用し、短期的な成果よりも、長期的な関係性や学びの場の構築を重視する実践である。

この枠組みは、個人の作者性や西洋的な芸術価値観を問い直し、公共文化機関における権力や資源の再配分を試みるものであった。しかしながら、展示作品に対して反ユダヤ的であるという批判が集中し、ドイツ国内で大きな論争を引き起こした結果、運営体制は危機管理へと移行し、多くのルンブン参加メンバーは制度的な支援を得られないまま取り残される形となった。

本講演では、この事例を通じて、知の脱植民地化がしばしば「テーマ」として表層的に扱われ、実質的な制度変革や意思決定権の移譲には至らない現状を明らかにした。ドクメンタ15は、文化的価値や歴史的ナラティブを再構成しようとする試みであった。それに対して、ドイツの文化政策に根強く残る植民地主義的・資本主義的構造が、それを支えることの難しさも浮き彫りにした。

一方で、フィールド調査やワークショップを通じて考察した、脱植民地的知識生産の実践的・理論的枠組みが紹介され、制度の中に「亀裂」を開き、多様な知や存在のあり方を育む文化政策の可能性にも言及した。

### レオナルド・バルトロメウス | 「Institutionをハックする—YCAMのケーススタディから」

日本での活動を通じ、制度の硬直性に対抗する手段として「ハッキング」の実践を試みてきた。インドネシアのコレクティブとは異なり、日本の公的機関には制度的制約が多い。ルル学校や「あそべる図書館」では、参加者主導の学びと制作の場を形成し、自律的な活動が生まれた。制度変革のためには、組織が運営システムの見直しを受け入れ、地域との協働による開かれた調整プロセスを構築する必要がある。

### 山本 浩貴 | 「私たちには(まだ)記憶すべきことがある—光州ビエンナーレ2024・日本パビリオンの経験から」

まず、冒頭に脱植民地主義には制度改革だけでなく認識や感覚の変化が不可欠であると指摘があった。その上で、光州ビエンナーレ2024日本館の経験を光州民主化運動の歴史的記憶と結びつけた考察が話された。冷戦期の米国の介入、韓国の軍事独裁、日本の植民地主義の残滓によって形成された抑圧を被った光州を、権力への抵抗の象徴的な場として捉え、西洋的な国別パビリオン制度を批判的に再検討しつつ、「国民国家」を内側、すなわちローカルな視点から解体する可能性と、ポストナショナル／トランスナショナルな視座を提示した。

### 秋野 有紀 | 「ミュージアムにおける「脱植民地主義」の現状と射程 ～ドイツのベニン・ブロンズ返還を一例として～」

「ベニン・ブロンズの返還問題」、すなわち植民地主義時代に来歴を持つ文化財の返還をめぐる議論が、脱植民地主義の観点から、制度、来歴、そして返還後の「その先」にまで及ぶ具体的な論点を通じて展開された。返還という「正義の実現」であるはずのプロセスが、時に新たな権力構造や不協和音を生み出していることが示され、ミュージアムという装置が抱える歴史的・政治的負荷を可視化した。

.....

### 【後半】

日本では、アートにおけるポストコロニアル／デコロニアルの議論は、まだ十分に確立されていない。そこで後半では、「日本の文化政策の領域において、ポストコロニアル／デコロニアルの議論をどのように発展させるか」について、より広い意見交換を行った。

はじめに、藤野が前半をまとめる形で、アートの世界による脱植民地化はアートプロジェクトの隆盛だけでは克服できない。ミュージアムにおけるコレクションの背後にある攻撃性、暴力性や植民地主義的構造への深い思想的な問いが必要だと認識が示された。

それに対して、秋野から次のコメントがあった。

世界の分断に対して文化政策がなしうることを考えるには、西洋の近代化の過程で生み出された思考回路や文化制度の批判的考察が必要なのは言うまでもない。だが、従来の価値観やものの見方の転換に負荷を感じる人たちのバックラッシュも置きており、それが分断を生み出している現実も見落としてはならない。理詰めではなく、それぞれの心情にも配慮しつつ、over-simplification(過度な単純化)を避けて議論・対話することが何より重要だと近年特に感じる。

第一次大戦期の、主に独仏に代表される「文化(固有・多様性)」「文明(普遍・直線的進歩)」の対立は、今日見たミュージアムのように、人類にヒエラルキーはないと証明するために現地の事物を蒐集した固有・多様性アプローチと、今まさに批判されている典型的な植民地主義的アプローチ(普遍・直線的進歩)との両方を「ミュージアム」において展開した。後者のみを念頭に置いて「ヨーロッパ中心主義」や「ミュージアム」と一言で片づけてしまう議論はあまりに粗雑であり、レッテルを貼って抽象的な論戦を戦わせるのみで、その内部での複数性や多様性を無視するならば、分断をさらに加速化させることに加担しかねない。

文化政策学としても、制度化された芸術文化の振興のみならず、文化人類学的な視点にもっと学ぶ必要がある。他者を西洋理性の眼差しで秩序だて、その地への植民地支配正当化と思想的に共謀した側面が主に「ミュージアムの思想」と捉えられ、批判されているものだ。だが、純粋芸術のミュージアムや植民地政策と親和性の高かったミュージアムのみならず、今日紹介したプロイセンの民族学博物館の最初

期にあった意図の複数性(それゆえに第二次大戦期にはナチに批判される)のような事例をも含めて、注意深く考察することが、「西洋的なミュージアム」というくくりを相対化する。西洋社会の分断を見るに、流行に乗ってこうしたレッテルを振り翳して抽象的に批判するのみならず、それをも批判的に再検証し相対化する見方にも視野を広げ、理詰めでは超えられない心情的反感を減らしつつ、脱植民地主義のプロセスを進めることが肝要だ。日本でも、ナショナリズム的に「固有」を強調する視点は容易なのであまり見落とされないが、「文化」と分かちがたく結びついてきた多様性というものについて、今後の文化政策学は一層考察を深めることが重要になるだろう。

つづいて、アートとデコロニアルの議論に移り、吉田からバルトに、インドネシアと比較しながら、日本のアートの特徴を尋ねたところ、バルトから次のコメントがあった。

インドネシアと日本のアートの世界における大きな違いの一つは、その構造にあると感じています。おそらく、それがインドネシアで多くのオルタナティブなアート実践、例えばアーティスト・コレクティブ(共同体)などが存在している理由の一つでもあるでしょう。国立の美術館やギャラリーといったインフラの不足は、一方では国際的な認知を得るうえでの課題となりますが、他方では、草の根の運動に基づいた批評的な実践を育む助けにもなっています。

一方、日本では、ほとんどのアートに関する言説は依然として正統な制度、特に国立の美術館といった国家主導の機関によって推進されています。そのため、戦争やジェンダー、植民地の歴史といったセンシティブなテーマを論じる際には、また別の課題が生じてきます。

しかし、草の根レベルやコミュニティベースの創造的なプロジェクトに目を向ければ、日本とインドネシアの間には、組織運営のあり方、美学的アプローチ、さらには経済的持続可能性において、多くの共通点が見られます。

脱植民地主義的な実践の一環として、私たちはこうしたコミュニティベースの活動にもっと目を向け、注意深く見つめていく必要があるのかもしれない。

また、吉田から山本に、これまでの議論を踏まえてのコメントと、日本での他の実践例の紹介を求めたところ、次のコメントがあった。

藤野、秋野の発表で明らかにされたように、ミュージアムのコレクションは「他者」を認識論的な支配下に置くための植民地主義的な装置としての側面を有していた。他者や異文化を分類・整理し、自らの知の体系に組み込むことが、その眼目であった。そうした点を批判的に検討しつつ、一方でミュージアムがもつ「脱植民地的な」可能性を引き出す知恵を発見していくことが求められているのではないだろうか。日本が東アジア諸国を植民地支配していた時期に略奪した文化財の返還を求める運動が顕在化している。そうした論争の的となっている文化財が収蔵されている場所が、現代アートの展覧会の会場として使用されることもある。私自身としては無暗に対立構造を作るのではなく、様々な領域の専門家と協働しながら議論を重ねていくことが重要だと考えている。

最後に、オズレムに、ドイツと比較しながら、日本での実践や議論の状況をどう思われるのか、コメントを求めた。

ドクメンタ15(documenta fifteen)では、ドイツにおいて「ルンブン(lumbung)」のような共同体モデルを通じて制度的な権力を再分配することで、支配的なシステムに亀裂を生じさせる可能性が示された。しかし同時に、そうした亀裂が、既存のガバナンスモデルやメディアの力学に直面したときに、いかに脆弱であるかも明らかになった。

一方、日本では議論が示すように、ポストコロニアル(脱植民地主義)やデコロニアル(脱帝國的)な視点に関する言説はまだ発展途上にあり、博物館が物語(ナラティブ)形成の中心的な役割を担い続けている。ドイツが確立された制度構造を批判から守ろうとする葛藤を抱える一方で、日本は高度に形式化された制度の中で、いかにしてシステム全体の変革を始動するかという課題に直面している。

将来的な協働の可能性として、ドイツの「開かれているが常に問われている状態」と、日本の「構造的な硬直性」という異なる条件を出発点に、草の根的な実践をいかに持続可能にするか、また、多様性を受け入れる政策的枠組みをいかに構築するかという、共通の戦略を探ることが考えられるでしょう。

内外の実務家、研究者、文化政策研究者だけでなく、美術史学者など垣根を超えた交流は初めてかと思う。今回の取り組みを、アートとポストコロニアル／デコロニアルの議論における「キックオフ・ミーティング」としたいと、本シンポジウムが締めくくられた。

※ この要約は、登壇者およびコーディネーターによって取りまとめられたものです。

.....

How Can Cultural Policy Respond to Global Divisions and Discrimination? — Perspectives from Art and Postcolonialism

### 【Purpose of the Session】

In the face of issues such as the global movement of refugees and migrants, the rise of exclusionary nationalism, and the destabilization of the international order symbolized by the war in Ukraine — along with the growing reexamination of historical injustices rooted in colonialism — we are now being compelled to confront deeply embedded structures of division and discrimination in the world.

How can cultural policy and the arts respond to these pressing contemporary challenges?

In this symposium, we focused on contesting the legacies of colonialism through art as an approach to this question.

This symposium approached that question by focusing on how colonial legacies can be contested through art.

- documenta fifteen (2022)
- Gwangju Biennale
- Yamaguchi Center for Arts and Media [YCAM]
- the return of the Benin Bronzes

In the second half, we explored the concepts of “postcolonial” and “decolonial,” outlining how these terms were used in different contexts. Based on this framework, we aimed to deepen the discussion on how these perspectives could be developed within the field of cultural policy in Japan.

### 【Speakers】

- Özlem Canyürek** (Zeppelin University)  
*Decolonial Cultural Practices – The Case of documenta fifteen*
- Leonard Bartolomeus** (Yamaguchi Center for Arts and Media [YCAM])  
*Hacking the Institutions: Case Studies from YCAM*
- Hiroki Yamamoto** (Jissen Women’s University)

We (Still) Have Things to Remember—From the Experience of the Japan pavilion at the Gwangju Biennale 2024

- Yuki Akino** (Waseda University)  
*Germany's Return of the Benin Bronzes: A Case for "Decolonization" in Museums*

### 【Coordinators】

- Takayuki Yoshida (Osaka Metropolitan University)
- Kazuo Fujino (Kobe University)

### 【First Half】

Özlem Canyürek

### *Decolonial Cultural Practices – The Case of documenta fifteen*

This presentation explored *documenta fifteen* (2022, Kassel, Germany) as a case study of decolonial cultural practice within the context of German cultural policy. Led for the first time by a non-European collective—*ruangrupa*, an Indonesian artist group—*documenta fifteen* redefined the curatorial model through the adoption of *lumbung*, a practice of communal resource-sharing rooted in Indonesian traditions.

The *lumbung* model centered on collective decision-making, shared budgets, and common infrastructures, involving 14 international member collectives. Instead of prioritizing event-based production or individual artistic authorship, *documenta fifteen* focused on long-term relationships, collaborative learning, and situated art practices. This approach sought to challenge dominant Western-centric norms in art valuation and institutional governance.

While the exhibition represented a rare attempt to redistribute institutional power and resources within a major publicly funded cultural platform, it also exposed structural tensions. Accusations of antisemitism regarding certain artworks sparked national controversy, shifting the institutional response toward crisis management and reputational control. In the process, many *lumbung* members—especially from the Global South—faced limited access to German media and were left without adequate institutional support.

This case illustrated both the potential and the limits of decolonial engagement in cultural institutions. It highlighted how decolonization of knowledge is often reduced to thematic representation without corresponding shifts in decision-making power. The presentation argued that *documenta fifteen* revealed deep-rooted patterns of coloniality and capitalism within German cultural policy, which continued to constrain efforts to redistribute authority, reframe cultural value, and support alternative narratives.

Through fieldwork during the exhibition and subsequent academic workshops, this research developed a practical and theoretical framework for understanding decolonial knowledge production within cultural policy. The presentation offered critical reflections on how collectivity-oriented practices can open “cracks” within dominant systems to enable plural ways of knowing, being, and organizing.

### **Leonard Bartolomeus**

#### *Hacking the Institutions: Case Studies from YCAM*

Through activities in Japan, I have attempted to practice “hacking” as a means to counter institutional rigidity. Unlike Indonesian collectives, Japanese public institutions are bound by numerous structural constraints. In projects such as *RURU Gakkou* and *The Speculative Library*, participant-driven spaces for learning and creation were established, giving rise to autonomous activities. For institutional transformation to occur, it is necessary for organizations to accept the revision of their operational systems and to build open adjustment processes in collaboration with local communities.

### **Hiroki Yamamoto**

#### *We (Still) Have Things to Remember—From the Experience of the Japan pavilion at the Gwangju Biennale 2024*

This presentation began by arguing that decolonization requires not only institutional reform but also a cognitive, epistemological and sensory transformation. It then examined the experience of the Japan Pavilion at the Gwangju Biennale 2024 in relation to the historical memory of the Gwangju Democratization Movement. Viewing Gwangju, as a symbolic site of resistance against oppression shaped by U.S. intervention during the Cold War, South Korea’s military dictatorship, and the legacy of Japanese colonialism, the lecture critically engaged with the Western-style national pavilion system. It explored the possibility of deconstructing the “nation-state” from within, that is from a perspective, and proposed post-national and transnational perspectives.

**Yuki Akino**

*Germany's Return of the Benin Bronzes: A Case for "Decolonization" in Museums*

The “Benin Bronzes return issue”—that is, the debate over the return of cultural artifacts with provenance rooted in the colonial era—was explored from a decolonial perspective, through specific arguments that encompassed institutional frameworks, provenance, and the complexities that arise after return. The process of restitution, which is expected to embody the realization of justice, was shown to sometimes generate new power structures and dissonance. The presentation made visible the historical and political burdens borne by the museum as an institutional apparatus.

.....

**【Second Half】**

In Japan, discussions on postcolonial and decolonial perspectives in the field of art are not yet well established. Therefore, in the latter half of the session, a broader exchange of ideas was held on how such discussions could be further developed within the realm of Japanese cultural policy.

To begin, Fujino summarized the first half by stating that decolonization in the art world cannot be achieved solely through the rise of art projects. A deeper philosophical inquiry is needed into the aggression, violence, and colonial structures underlying museum collections.

In response, Akino offered the following comments.

In examining the potential of cultural policy to respond to global polarizations, it is crucial to critically review the cognitive frameworks as well as cultural institutions that developed during the process of Western modernisation. However, it is also essential to be aware of the backlash from those who feel burdened by the shift away from their familiar values and perspectives, which is creating polarizations. Rather than relying exclusively on rational arguments, I have increasingly come to feel that it is fundamental to take into account each stakeholder's sentiments and to avoid oversimplification.

In the period preceding World War I, a notable rivalry emerged between the concepts of "culture," representing inherency and diversity, and "civilization," representing universal and linear progress. This rivalry was primarily embodied by Germany and France. Both approaches have been incorporated into the “museum”: One that collected indigenous artifacts to prove humanity has no hierarchy but is just different, for example in the earliest ethnological museum in Berlin which I mentioned today, the other have developed the very colonialistic perspective and approach, it reordered others’ under the gaze of Western rationality and conspired to justify colonial rule, which is now mostly under criticism. Discussions that rely on oversimplified labels, such as "Eurocentrism" or "museums as ideological apparatuses," which mainly focus on the latter, therefore fail to adequately address the complexity of the subject matter and further polarization. Rather than engaging in abstract conflicts by affixing labels to entities, it is crucial to examine the inherent pluralities and diversities within these entities. Japanese cultural policy studies need to learn not only from institutionalized arts and culture but also from cultural anthropological perspectives. While emphasizing the concept of "indigenous" from a nationalistic viewpoint is relatively straightforward and rarely overlooked, cultural policy studies in the future should endeavor to delve more profoundly into the examination of diversity, an element that is inextricably linked to "culture."

The discussion then shifted to art and decoloniality, with Yoshida asking Bart about the characteristics of Japanese art compared with Indonesian art. Bart responded with the following remarks.

I feel most of the significant difference is the structure of the art world in Indonesia and Japan. Perhaps, this is also one of the reason why so many alternative art practice such as artist collectives exist in Indonesia. The lack of infrastructure such as national museum or galleries while on one hand creates a challenge for international recognition, on the other hands it helps nurturing critical practice that are based on grass root movement. While in Japan, most of the discourse still being driven by canon institution--mostly state-owned museum, which has different challenges when discussing sensitive topic such as war, gender, as well as colonial history. But if we go down to the grassroots or community-based creative project, there is a lot of overlapping factors between Japan and Indonesia, whether in organizational practice, aesthetic approach, or even economic sustainability. Perhaps as part of decolonial practice, we have to look and pay attention at those community-based activities much more often.

Yoshida then asked Yamamoto for comments based on the discussion so far, as well as for examples of other practices in Japan, to which Yamamoto responded.

As was made clear in the presentations by Fujino and Akino, museum collections have historically functioned, in part, as colonial apparatuses designed to place the “Other” under epistemological domination. Their primary aim was to classify and order others and different cultures, thereby incorporating them into one’s own system of knowledge. While subjecting these aspects to critical examination, it is also necessary to seek forms of wisdom that can draw out the museum’s “decolonial” potential.

In recent years, movements demanding the restitution of cultural properties looted during the period when Japan exercised colonial rule over East Asian countries have become increasingly visible. Some of these contested cultural objects are housed in institutions that are also used as venues for exhibitions of contemporary art. From my own perspective, rather than uncritically constructing oppositional frameworks, it is crucial to engage in sustained dialogue through collaboration with specialists from a wide range of fields

Finally, Özlem was asked to share her thoughts on the situation of practice and discourse in Japan, comparing it with the case of Germany.

In Germany, documenta fifteen showed how redistributing institutional power through collective models like lumbung can open cracks in dominant systems, but also how fragile these cracks are when confronted with entrenched governance models and media dynamics. In Japan, as the discussion showed, the discourse on postcolonial and decolonial perspectives is still emerging, and museums remain central to shaping narratives. While Germany struggles with defending established structures against critique, Japan faces the challenge of initiating systemic change within highly formalised institutions. A future collaboration could explore how these different conditions, Germany’s contested openness and Japan’s structural rigidity, might inform shared strategies for sustaining grassroots practices and building policy frameworks that embrace plurality rather than control.

This symposium may be the first instance of cross-disciplinary exchange involving not only practitioners and researchers from both within and outside the country, as well as cultural policy experts, but also art historians. The symposium concluded with the positioning of this initiative as a “kick-off meeting” for discussions on art and postcolonial/decolonial thought.

Compiled by the panelists and coordinators